

# タンジュン村の状況について

2006年<sup>3</sup>月9日

原告ら訴訟代理人

弁護士 奥村 秀 二



第1	タンジュン村の概要	1
第2	調査の概要	2
第3	調査の内容	3
1	バンチャ・ルブック地区	3
(1)	バンチャ・ルブック地区東側及び中央部の状況：別紙1	3
(2)	バンチャ・ルブック地区西側の状況：別紙2	3
2	バンチャ・ケロ地区及びカンブン・サワの状況：別紙3	3
3	高台部分の状況：別紙4	3
4	雨季の増水時の状況：別紙5	3
5	住民生活と川との関わり：別紙6	3
6	タンジュン村の被害状況等について	4
(1)	冠水状況	4
(2)	住民からの聞取	5
第4	考察	6
1	川沿いに発展した村落の状況と水没・冠水による被害	6
2	東電設計及び水力発電所（PLTA）による測量調査	7

## 第1 タンジュン村の概要

1 タンジュン村は、リアウ州カンパル県ティガブラス・コト・カンパル郡の村のひとつであり、本件ダムによってできたダム湖の西端に位置する。

同村は、カンパル・カナン川が大きく流れを変える地点に位置している。同村まで北西から南東に流れ来たカンパル・カナン川は、一旦180度方向を変えた後、北東の方向へ流れていっている（別紙地図1参照：なおこの地図1は甲B59の一部をカラーコピーしたものである）。このため、同村には長靴のような形をした、川に突きだした岬のような

地形部分が存する（以下この部分を岬部分という）。この岬部分がバンチャ・ルブック地区である。そして、この地区の北東側対岸がバリック・タンジュン地区であり、南西側対岸がバンチャ・ケロ地区となる（別紙地図3参照）。なお、バンチャ・ケロ地区の北にカンブン・サワと呼ばれる地区がある。

- 2 岬部分の北側には、高台となっている部分（以下この部分を高台部分という）が存し、そこには、市場（パサール：PASAR）及びモスクを中心とする居住地に加え、バリック・タンジュン地区の住民が移転したドゥスン（DUSUN：集落）3及びバンチャ・ルブック地区の住民が移転したドゥスン4という居住地等がある（別紙地図4参照）。

タンジュン村には、バトゥ・ブルスラット村で国道と接続する州道が通っているが、この道路はこの高地部分を通っている。

- 3 バンチャ・ルブック地区、バリック・タンジュン地区及びバンチャ・ケロ地区の3地区は、高台部分より20m程度低くなっており、後述するとおり本件ダムバックウォーターの影響を受けることとなった。また、カンブン・サワ地区も、高台部分より低く、本件ダムバックウォーターの被害を受けた。

リアウ州が、作成したバックウォーターの影響を受ける地区を示した地図（別紙地図1）では、上記4地区はバックウォーターの影響を受ける地区を示す緑色に塗られている。

- 4 タンジュン村は、JICAが東電設計に委託して作成したフィージビリティ・スタディ（以下F/Sという）では、本件ダム建設に伴う水没の影響をうける地域とはされていない。ところが、実際には、同村は本件ダムバックウォーターによる被害を受け、350世帯の住民が高台部分に移転している。

## 第2 調査の概要

タンジュン村の状況については、甲C19号証において既に報告したが、2005年6月25日及び同年9月5日に、バンチャ・ルブック地区、バンチャ・ケロ地区及びカンブン・サワの状況を調査した。

調査の内容は、2005年6月の調査では、バンチャ・ルブック地区の東側及び中央部、同年9月の調査ではバンチャ・ルブック地区の西側並びにバンチャ・ケロ地区及びカンブン・サワを踏査し、それぞれの地区に東電設計及び水力発電所（PLTA）が設置した冠水の影響を示す杭の状況、各地区の家屋、農地の状況等を、Herman（原告番号K9）及びSambaktri（原告番号K1）から説明を受けた。

上記2回の調査とも、踏査調査後、本件ダム完成後の冠水状況、冠水による被害状況等を同人らを含む住民らから聴取した。

- 2 以下、各地区の状況を、地図と写真を用いて説明し、最後に住民から受けた説明の内

容をまとめる。

なお、これらの調査の通訳は、2005年6月は、坂井美穂氏が行い、同年9月は井上千寿代氏が行った。

### 第3 調査の内容

#### 1 バンチャ・ルブック地区

##### (1) バンチャ・ルブック地区東側及び中央部の状況：別紙1

2005年6月の調査で上記部分を踏査した。同調査は、岬部分の付け根の東端から岬部分に降りるところから開始し、岬部分の東側集落ほぼ南端まで行き、そこからさらに岬部分の西側河岸まで踏査した。

別紙1は、上記踏査の順に従って上記各部分の状況を報告したものである。各写真の撮影場所・撮影方向は地図2に記載したとおりである。

##### (2) バンチャ・ルブック地区西側の状況：別紙2

2005年9月の調査で、上記部分を踏査した。同調査は、岬部分の付け根の西側よりのところから上記部分に降りるところから開始し、岬部分の西側集落を南に下り、途中でバンチャ・ケロ地区に渡った。

別紙2では、上記踏査の順に従い、岬部分の付け根の西側を降りるところから、バンチャ・ケロ地区に渡るまでを報告したものである。各写真の撮影場所・撮影方向は地図2に記載したとおりである。

#### 2 バンチャ・ケロ地区及びカンブン・サワの状況：別紙3

2005年9月調査で、上記各地区を踏査した。

別紙3は、上記各地区の南側部分から北に向けた順で状況を報告したものである。各写真の撮影場所・撮影方向は地図3に記載したとおりである。

#### 3 高台部分の状況：別紙4

2005年6月、9月の調査で、市場（パサール）を中心とした高台部分の状況と、高台部分の裏（北西）に設置された杭の状況を確認した。別紙4はその内容を報告したものである。各写真の撮影場所・撮影方向は地図4に記載したとおりである。

#### 4 雨季の増水時の状況：別紙5

当職は、タンジュン村には、2003年8月、2004年1月、2005年6月、2005年9月の計4回調査等に赴いた。このうち、2004年1月の調査時が雨季で、その他は乾季であった。そこで、雨季と乾季とでカンパル・カナン川の水位が変化する状況を、同じところを撮影した写真で比較する。洪水時ではないときでも、雨季と乾季では相当の水位の差があることがわかる。

#### 5 住民生活と川との関わり：別紙6

短い調査期間ではあったが、住民生活と川との密接な関わりを感じさせる風景に出会ったので報告する。

## 6 タンジュン村の被害状況等について

### (1) 冠水状況

2005年6月25日にタンジュン村の調査を行った際、ダム建設によるタンジュン村での冠水被害の状況を聞いた。参加者は、Herman、Sambaktriを含む住民7人であった。聞き取った内容は以下の通りであった。

ア 人の集落があったところとしては、バリック・タンジュン地区とバンチャ・ルブック地区が冠水被害にあった。バリック・タンジュン地区はほとんど全部が冠水被害を受けたが、バンチャ・ルブック地区では一部冠水被害を受けなかった。

バンチャ・ルブック地区には、ピトパン、ピリアン、ドモといったスクのメンバーがおり、それぞれのルマ・ガダンを中心にまとまって住んでいたということであった。

イ 冠水したところを地図上に示すように依頼したところ、冠水地域を図面に正確に示すことはできないということであったが、多少不正確でもわかる範囲でおおよその集落と冠水地域の位置関係を示してもらった。その概要は別紙地図5に図示したとおりである。

冠水被害は、バリック・タンジュン地区及びバンチャ・ルブック地区の他、バンチャ・ルブック地区の西側対岸（バンチャ・ケロ地区）及び南側対岸（スンガイ・ランバイ地区）にも及んだということであった。このバンチャ・ルブック地区の西側対岸及び南側対岸は、人が居住する集落ではなく、農園（ゴム等）や水田、陸稲、畑等がある地区で、これらの農作物が被害を受けたということであった。

ウ 本件ダムができるまでも、洪水で冠水することはあったが、雨がやめば1日くらいで水は引いていた。ところが、ダム建設後の冠水は、雨がやんでも1週間くらいは引かなかった点でそれまでとは違ったということであった。

その結果、稲やゴムの木といった農作物に大きな被害を与えるとともに、冠水被害を受けた住民たちとしては、安心して住めなくなり、高台に移転する人が出てきたということで、その後、バンチャ・ルブック地区もほとんどの住民がそれに続いて高台に移転したということだった。バンチャ・ルブック地区の中には冠水しなかったところもあるが、その住民もいつ被害を受けるかわからないこと、他の住民たちが皆移転してしまうことから、冠水被害を受けなかったところの住民も移転したということだった。

しかし、冠水被害でほとんどの住民が移転してしまった後もそこに住み続けている世帯が2世あり、その内の1世帯が、2005年9月の調査で聞き取をした Niamin であるということだった。これらの世帯は、高台に移転するのにかかる費用を負担で

きないため、従前の居住地に残っているということであった。

エ ダム建設による冠水被害は、1998年のはじめ頃に最初の被害があり、その後2001年までに合計4回ほどあったが、2002年以降は冠水被害が生じていないということだった。

## (2) 住民からの聞取

ア 2005年9月の調査時に、Miamat Bin Tihi (86歳：原告ではない) 及び Nusri Dt. Gindo. S (49歳、原告番号K5) から、冠水による被害の状況について聞取をしたので、その内容を報告する。

### イ Miamat からの聞取内容

同人は、カンブン・サワに0.5haの水田を持っていたが、ダム完成後の冠水によって4、5日間水浸しになってしまったため稲がだめになってしまった。その後も冠水してしまうおそれがあるため米を作ることができず、水田はダメになってしまっている。現在は、別のところでガンビルを栽培しているが、その収入だけでは生活が大変だ。

バンチャ・ルブック地区の南端に仕事用の小屋を持っていたがそれもダムの影響で流されてしまった。

私と同様に冠水したところに田や畑を持っていた人はたくさんおり、皆大変困っている。冠水については、事前に、村や政府、PLTAから説明はなく、急に冠水してしまった。このことについては、何の補償もない。

### ウ Nusri からの聞取内容

以前は、バンチャ・ルブック地区にすんでいた。ドモ族に属している。スクのルマ・ガダン、現在、壊れてしまっていて残骸があるだけだ。

バンチャ・ルブック地区では、ルマガダンを中心にして、各スクごとにまとまってすんでおり、うまく社会関係が営まれていた。しかし、ダム建設が問題になってから住民たちの関係がうまくいかなかった。私は、そうしたことや、ダム建設について、タンジュン村の一部が水没するという話を聞いていたので、冠水被害が出る前に高台部分に移転した。

バンチャ・ケロ地区に水田を持っており、少し高いところには陸稲も植えていた。耕作地は、2ha位だった。これらは冠水被害を受けた。

冠水後、住民たちが皆高台に移転してから、スクのメンバーが散らばってしまい、まとまるのが難しい。そういう中で、ミナンカバウの伝統的行事は、続いているものもあるが、たいへん難しくなっている。行事を開くために必要なムシャワラすら難しい状況だ。今も続けられている行事は断食あけに家族で行う行事とか、小舟レース(パジュサンパン)、ピナンの木を上る競争(パンジャバタンピナン)などはある。断食にはいるときやあけるときにバノン(太鼓)をたたきながら練り歩く行

事はできなくなっている。

#### 第4 考察

2005年6月、9月の調査結果を踏まえて、タンジュン村のバンチャ・ルブック地区が水没した各村の従前の様子をうかがわせるものとして重要と思われるので、この点について補足する。また、本件調査によって明らかになった東電設計によるF/Sの問題点についても、あわせて補足する。

##### 1 川沿いに発展した村落の状況と水没・冠水による被害

(1) コトパンジャン地域の各村は、カンパル・カナン川やマハット川沿いに発達してきた村である。地図1は、本件ダムによって水没した地域のリアウ州側8か村及び西スマトラ州タンジュン・パウ村の水没前の状況が、バックウォーターの影響を示す緑色の下に記載されている。これをみると、上記各村が川沿いに集落を形成していることがよくわかる。

このような村落の状況となったのは、グスティ・アスナン教授の報告書（甲 B62）に書かれているように、もともとコトパンジャン地域各村を開拓した祖先は、川を渡ってその地にたどり着いたものであること、20世紀初期まで、コトパンジャン地域と外部（東側のリアウ及びマレー半島、並びに西側の西スマトラ）との間の交通・輸送手段は川を利用した水運に依存していたことによるものである。

(2) タンジュン村のバンチャ・ルブック地区は、カンパル・カナン川沿いに形成されている集落であり、水没前のコトパンジャン地域の各集落の状況を示していると思われる。

そのバンチャ・ルブック地区の状況は、別紙1及び2で報告したとおりであり、各家屋は、高低差の少ない川沿いの平地部分に、数メートルから数十メートルの距離をおいて建てられている。そして、各スクの象徴であるルマ・ガダンを中心にスクごとにまとまって集落を形成していたということであり、スクごとの相互扶助が容易な状況にあった。現在もバンチャ・ルブック地区に住んでいる Niamin は、親戚である Herman から、生活や、ヤシ・マンゴーの販売等について扶助を受けているということであったが、従前はこのような扶助が互いに網の目のように行われ、生活が営まれていたものと思われる。

また、川がすぐ近くにあったことから、生活用水の入手、洗濯（写真 68 参照）、マンディ（水浴び）、トイレなど、川がいろいろな生活資源を提供していた。

さらに、Nusri や Herman（甲 C35）が伝統行事について触れているが、上記のような居住形態のもとで、村の行事（お祭り）は、スクごとにまとまり、地域を練り歩いたりして行われていた。

水没した各村も同じような居住地、居住形態で、同じような生活、文化が営まれていたと思われる。

このタンジュン村でも、ダム建設による冠水被害のために高台部分に移転せざるを得なかったことから、スクごとにまとまって集落を形成する居住形態が変わってしまい、これまでのようなスクごとの相互扶助、並びに住民たちの生活や文化に困難をもたらしている。また、川と離れたことから生活上の不便をもたらしている。このことと比べれば、水没した各村では、完全に従前の居住地から切り離され、移転先も居住場所もくじ引きによっており、従前の生活・文化は大きな被害を受けたことは明らかであろう。

(3) タンジュン村では、バンチャ・ルブック地区の住民たちは、バンチャ・ケロやカンブン・サワ、スンガイ・ランバイという川の対岸にあたる地区に、水田、陸稲園、畑、農園（ゴム、ガンビル、果樹等）を持っており、それらからの収入で生活をしていた。

もともと高台部分に居住していた住民も、水田、畑等を上記各地区に持っていたものが多いようである。

これらの地域は、カンパル・カナン川の堆積作用によって形成された平地部分で地味がゆたかであったと思われる。住民たちはそこを切り開いて、場所によっては灌漑設備を作り、稲作や畑作を営んできた。

水没した各村でも、タンジュン村と同じように、集落の周りに存在した、カンパル・カナン川やマハット川によって形成された平地部分に、水田、畑をもうけていたと思料される。そして、少し山に入ったところにゴムなどの農園を開いていたであろう。住民たちはこれらから生活の糧を得ていた。

タンジュン村でも、ダム建設による冠水により、従前の農地が大きな被害を受け、住民たちは生計手段を失ってしまっている。水没した各村は、こうした従前の農園・農地は全く奪われてしまった（ダム貯水以前は、移転地に移転しながらも、従前の農園・農地に依存して生活をしてきたことは、アンダラス大学社会経済的影響評価報告書 [甲 B39] に報告されているとおりである）。

## 2 東電設計及び水力発電所（PLTA）による測量調査

従前から、タンジュン村に東電設計が設置した杭があることは明らかになっていたが、今回の調査で、東電設計が設置した杭は1本ではなく、タンジュン村のバンチャ・ルブック地区東側河岸全体、バンチャ・ケロ地区、さらに高台部分の裏（北西側）に及んでおり、東電設計がF/Sの作成にあたり、タンジュン村全体を測量調査していたこと、その結果タンジュン村も本件ダムにより影響を受ける地域であり、その一部で住民移転が必要となることを把握していたことが明らかとなった。

原告側が入手したりアウ州作成にかかる水没影響地域図（地図1）においても、タンジュン村の高台部分以外はすべて水没影響地域に含まれている。また JBIC が作成した

SAPS 中間報告書でも、Location Map of Resettled Villages (1) 及び同 (2) では、タンジュン村のバンチャ・ルブック地区は完全に水没し、その周辺地区も一部水没することが示されている。

F/Sには、これらの事実は反映されていない。

以 上



□ バンチャ・ルブック地区東側及び中央部の状況

1 写真1は、岬部分の東側付け根からバンチャ・ルブック地区に降りる階段をみたものであり、高台部分とバンチャ・ルブック地区に高低差があることがわかる。

写真2は、高台からバンチャ・ルブック地区を見下ろしたものであり、写っている川がカンパル・カナン川で、川の右側がバンチャ・ルブック地区で、左側がバリック・タンジュン地区である。



1



2



3

写真3は、バンチャ・ルブック地区の北東角からバリック・タンジュン地区を見たものである。写真の左端でカンパル・カナン川が右に大きく曲がっているのが写っている。



4

写真4は、バンチャ・ルブック地区の北東角にあったムショラ（礼拝堂）の跡地（土台）である。ダム建設前はここにムショラがあった。

写真5は、バンチャ・ルブック地区の北東角を撮影したものである。写っている家屋は廃屋となっている。その右側奥に写真4のムショラの跡が写っている。そのさらに奥は雑木林となっている

が、ここには小川が流れている。なお、丙 B2 の写真⑭は、写真5の奥に写っている雑木林の手前から雑木林の方を写したと思われる。 [5]



2 写真6はムショラの裏（西側）に PLTA が 1997 年頃に設置した杭である。海拔 85 m を示すものでここまで水没するという説明であったとのことである。



写真7は、上記杭周辺の様子を南側（高い方）から見たものである。杭の北側にかけて低地となっているのがわかる（なお、この写真はパノラマ合成をしているため、特に右側に歪みが生じている）。



[7]



[8]

いる廃屋である。なお、写真中央右側にこちらを向いて写っている人物が Herman である。

9

10

3 写真 9, 10 は、バンチャ・ルブック地区東側の川岸に戻り少し南に行ったところに設置されていた杭である。Sambaktri によると、この杭は 1982 年頃に東電設計が設置したものであるということで、海拔 85 m を示すという説明だったとのことであった。



写真 10 の上方に写っている対岸はバリック・タンジュン地区である。

なお、これらの写真に写っている杭が、丙 B2 の写真⑮の杭と思われる。

11

4 さらに川沿いに南に進むと、ルマ・ガダンが川に面して立っていた (写真 11, 12)。このルマ・ガダンは、ピトパンというスクのものであるということであった。



本件ダム完成後の冠水時には、このルマ・ガダンのところで、3 m ほどの高さまで水が来たということであった。



12

写真 12 でルマガダンの左側に立っている壁が白い家屋は廃屋であった (写真 13)。



13

その南側にも廃屋が続いていた（写真14）。

14



5 写真 14 の廃屋のすぐ南側に杭が設置されていた（写真 15, 16）。Sambaktri の説明では、この杭は、PLTA が 1997 年頃に設置したもので、海拔 85 m を示すものと聞いたと  
いうことである。

16



15



6 上記杭の少し南側にさらに PLTA の杭があった（写真 17, 18）。この杭は他の杭と違い、細長い四角のコンクリート製杭で、高さが 40 cm ないし 50 cm ほどあり、「PLTA」という彫り込みがあった。これは

1990 年頃に設置されたものであり、冠水の影響を受



17



18

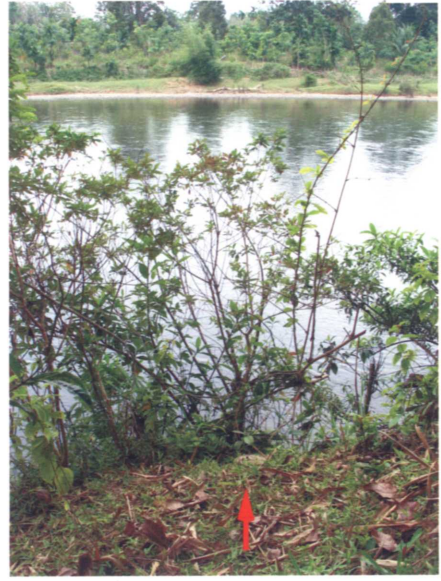
けるという意味だと聞いたとのことであった。

1 上記杭のさらに南側に、東電設計が 1982 年

19

頃に設置した杭があった（写真 19, 20）。これも写真 9, 10 と同じく海拔 85 m を示すという説明だったとのことであった。

Herman によると、この杭の南側にも岬部分の東側河岸一帯に杭が設



20

置されているとのことであった。

8 上記東電設計の杭から少し北に戻ったところでバンチャ・ルブック地区を西に横断し同地区の西側河岸に向かった。西側に向かって歩き始めると、左右に多数の家屋が存した（写真 21 ~ 24）。写真 21 の右端奥が川で、藪の間に少し水面が写っている。 21



22



23



24

写真 25, 26, 27 は、バンチャ・ルブック地区の西側河岸に出る手前のところで、西南方向から北東方向までの約 180° の見通しを撮影したものである。このあたりも多くの家屋が建っている。写真 25 に写っている建物は、川縁に面して建っているものである。写真 26 でもっとも遠方に写っている人物が立っている位置が、写真 28 で写真下半分に左から右下隅にかけて写っている道の右端あたりに当たる。



25



26



27

到着したバンチャ・ルブック地区の西側河岸は、土手のように高くなっており（写真 28）、川沿いに家が建っていた。

なお、写真 28 に写っている木々の奥に写真 39, 40 のルマ・ガダンが位置している。



28

## □ バンチャ・ルブック地区西側の状況

29

1 写真 29 は、岬部分の西側からバンチャ・ルブック地区に降りるところを見下ろしたものである。西側部分でも岬の付け根部分と岬部分には高低差があることがわかる。



写真 30 は、少し進んだところで高台部分を望んだものである。写真ほぼ中央のところから降りてきた。高台を降りてきたところから手前にかけて広がっている草地部分は、冠水

前は水田に利用していたということである。



30

2 岬の付け根西側をそのまま南に進んだところに、ルマ・ガダンがあった(写真 31, 32)。住民たちが高台に移転した後、放置されているため崩壊しかけている。ダム完成後の冠水時には、このルマ・ガダンのところで、肩の高さくらい(約 1.5 m)まで水が来たということであった。

31

32



3 上記ルマ・ガダンから南に進むと、家屋が建ち並ぶところに出た(写真 33, 34, 35) 写真 35 の中央やや左遠方に移っている赤い屋根の家屋が、Herman の旧自宅であり、1999 年頃に移転するまで母と一緒に暮らしていた。写真 36 はその家の前に Herman が



立断しているところを写したものである（この写真は2005.6撮影）。



35



この Herman の家のすぐ西側に、Niamin（原告番号 K177）の住居があった（写真 37, 38）。

写真 38 の中央の女性が Niamin である。同人は、他の住民たちが移転した後もここに住み続けているとのことであった。同人から事情を聞いたところ以下の通りであった。

「本当は他の住民が移転したときに自分も一緒に移転したかったが、お金がなかったので移転できなかった。ここで夫と2人で生活してきたが、その夫も5年前になくなり、今は1人でここで生活している。自分には



子どもも孫もおらず、1人きりである。

ダムができた後、他の住民たちは皆、水難を心配して移転してしまった。幸いにもこの家までは水が来なかったのでこの場所で生活することはできたが、他の住民たちが移転してしまった後は以前より生活が難しくなった。その上、年をとったので、今では水を汲み行くのも大変だ。

ヘルマンが親戚なので、ヘルマンが時々見に来てくれる。先日足をくじいて動けなくなっていたとき、ヘルマンが助けてくれた。体の調子が悪いときは1人では生活できないので、ヘルマンがヘルマンの母の家まで連れて行ってくれ、そこでしばらく世話になるようにしている。

生まれてからずっとこの家に住んでおり、今はここにいるのがいい。ここでは庭にはヤシやマンゴーがあり、それを食べたり、その実を売って生活していくことができる。ヤシやマンゴーの実を売るのはヘルマンが助けてくれている。」

4 Niamin の自宅から西に向かうとバンチャ・ルブック地区の西側河岸に出た。そこには、バンチャ・ルブック地区の3つめのルマ・ガダンがあった（写真39, 40：写真39は2005年6月に撮影）。

このルマ・ガダンは、Herman のスクのもので、Herman の母が記憶にあることには既に建っていたとのことであった。かつては、このルマ・ガダンには、

Herman のスクのニニック・ママックだけではなく、タンジュンの各スクのニニック・ママックらが集い、ムシャワラを行ったという。



39



40

5 上記ルマ・ガダンを川沿いに南に進むと、6月の調査時にバンチャ・ルブック地区東河岸から歩いてきた道と合流し、さらに南に進むと、川縁に墓地があった（写真41）。

この墓地をもう少し南にいったところで川岸におり、対岸のバンチャ・ケロ地区に船で渡った。写真42はバンチャ・ケロ地区側から、バンチャ・ルブック地区から渡って

こようとする船を写したものである。

9月には、乾季であるため、カンパル・カナン川の水位は下がっており、バンチャ・ルブック地区西岸の土手と水面とに高低差があることがわかる。



41



42

## □ バンチャ・ケロ地区及びカンブン・サワの状況

- 1 バンチャ・ルブック地区の西側対岸にバンチャ・ケロ地区が位置する。

写真 43, 44 は、バンチャ・ルブック地区からバンチャ・ケロ地区を望んだものである。河岸沿いに川面から 2, 3 m の高さに低地部分が広がっている。写真 49 は対岸をあがりさらにその奥に広がっている平地部分を撮影したものである。後述するようにこの平地部分は水田として使用されていたということであった。



- 2 バンチャ・ケロ地区にも、東電設計の杭があるということで、船で同地区に渡り杭を確認した。1 つめの杭は、当職がバンチャ・ケロ地区で確認した杭の中でもっとも南に位置するものである（写真 45, 46）。写真 46 の上方に写っている藪の奥がカンパル・カナン川となる。

同行した Sambaktri によると、この杭は 1982 年頃に東電設計が打ったものということだった。

- 3 2 つめの杭は、上記杭の少し北側にあった（写真 47, 48）。写真 47 の上方の藪の奥がカンパル・カナン川となる。



同行した Sambaktri によると、この杭も 1982 年頃に東電設計が打ったものということだった。

4 この 1 つめの杭と 2 つめの杭の西側には、現在は草原が広がっており、牛がいた (写真 49



47

: 写真上方が一部欠けているのはパノラマ合成をしているためである)。

同行した Herman によると、この草原は、従前は水田だったが、ダム完成後、冠水したため水田としては使用できなくなってしまったということである。また、この地域については、測量はなされたが、補償金の支払いはされていないとのことである。



48



49

5 上記杭があったところ北に進み、カンブン・サワと呼ばれる地区まで来たところ、カンパル・カナン川に注ぐ小川の縁に 3 つめの杭があった (写真 50, 51, 52)。



50



51

写真 50 に真ん中やや上に写っている川はカンパル・カナン川である。写真 51 にはカンパル・カナン川に注ぐ小川が



52

写っている。

53



この小川の上流部分には、以前水田であった地区があった（写真 53, 54）。ここには灌漑用水が通っており、これを使用して稲作が行われていた。しかし、ここにも冠水の影響が及び、耕作が放棄されてしまったため、現在は写真にあるように草原となっており、牛が飼われていた、

54



写真 55 は、写真 53, 54 からさらに北西方向に進んだところに存した水田の跡地を撮影したものである。カンブン・サワには、かつて相当の広さの水田が存したことがうかがえた。

55



## □ 高台部分の状況

- 1 タンジュン村の高台部分には、市場（パサール：PASAR）及びモスクを中心とする居住地に加え、バリック・タンジュン地区の住民が移転したドゥスン（DUSUN：集落）3及びバンチャ・ルブック地区の住民が移転したドゥスン4という居住地等がある（別紙地図4参照）。 56

このうち、市場を中心としたタンジュン村の高台部分の様子を報告する。

- 2 写真 56 は、市場の様子を撮影したものである。市が立つ日には、



この屋根の下に各人が店を出し、人がにぎわうことになる。この時は市が立っていないため、閑散としていた。

写真 57 は市場の東側向かいにあるモスクを撮影したものである。



写真 58 は市場の南東角から市場に進入する道路を撮影したものである。 57

写真 59 は、市場の南西角から南に進み、バンチャ・ルブック地区に向かう途中にあるサッカー場を撮影したものである。この写真右端にある道をまっすぐ進むと、写真 29 にあるバンチャ・ルブック地区への降り口に着く。



3 この高台部分の裏（市場の北西側）に東電設計や水力発電所（PLTA）が設置した杭があるということであったので、その案内を受けた。

市場の裏（北西）へ進む道を行くと、下りになっており、暫くすると川辺に出た。川に降りる道の横に杭が存した。

写真 60, 61 は、その杭を撮影したものである。「KG23」という彫り込みがある四角形の杭であった。この杭にある「KG」は冠水影響地域（Kawasan Genangan）の頭文字を意味し、東電設計が 1982 年頃に設置したものであるということであった。写真 60 の左上方に写っている水面はカンパル・カナン川の一部である。



60



61

上記杭の少し南側に、写真 17, 18 と同様の杭が存した（写真 62, 63）。

この杭は、写真 17, 18 と同様、1990 年頃、PLTA が設置したものであるということ、PLTA という記載があった。

写真 62 の中程に写っている水面はカンパル・カナン川の一部である。



62



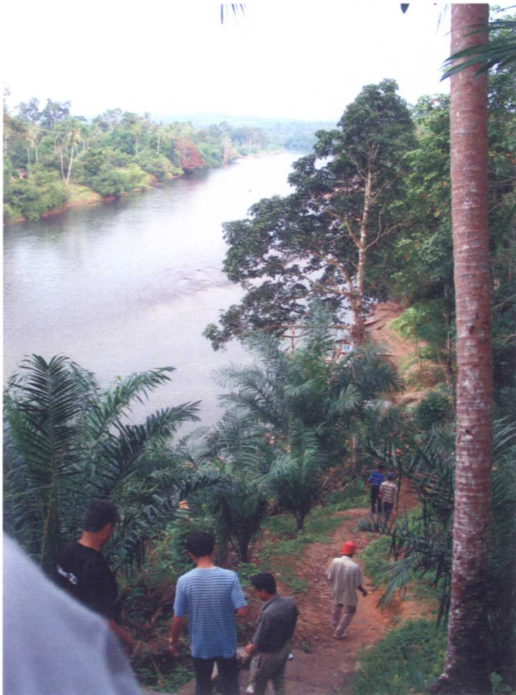
63



## □ 雨季の増水時の状況

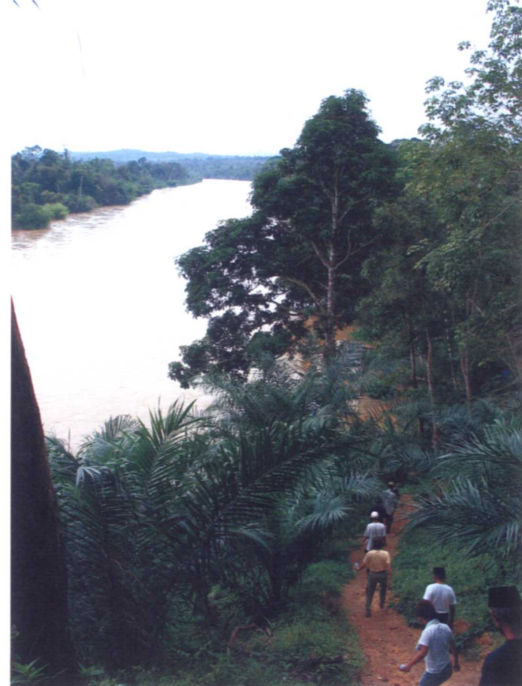
カンパル・カナン川は、雨季と乾季でその水位が大きく異なり、川の様相が全く違う。写真 64、65 は、写真 1 から少しくだったところで南の方を向いてカンパル・カナン川を撮影したものである。乾季である 2003 年 8 月の写真では川に中州が見えるが、雨季である 2004 年 1 月の写真では川は茶色く濁っており、川の水位が上昇し中州等は見え、乾季に比べ川が盛り上がっているように見える様子がわかる。

2003 年 8 月 (乾季)



64

2004 年 1 月 (雨季)



65

写真 66、67 は、写真 4 のムショラの南側あたりから南方向を向いて、カンパル・カナン川とそのほとりに建っている廃屋を撮影したものである。

乾季の写真では川の中に中州があるのが写っているが、雨季には水位が上がっているため、中州は存せず、川の水も茶色く濁っている。

また、平地部分の地面の高さと比べ、乾季の場合には水面との高低差があるが、雨季の場合は高低差がかなり狭まってきていることが見て取れる。ダム完成前の洪水の場合にも、雨季のこの水位がさらに上昇することによって、川の水がバンチャ・ルブック地区の敷地内に入れ込んでいたものであるが、ダム完成後も冠水被害では、この写真のあたりで 3m ほどの冠水となった上、その水が長期間引かず、被害を発生させた。



66

2005年6月(乾季)



67

2004年1月(雨季)

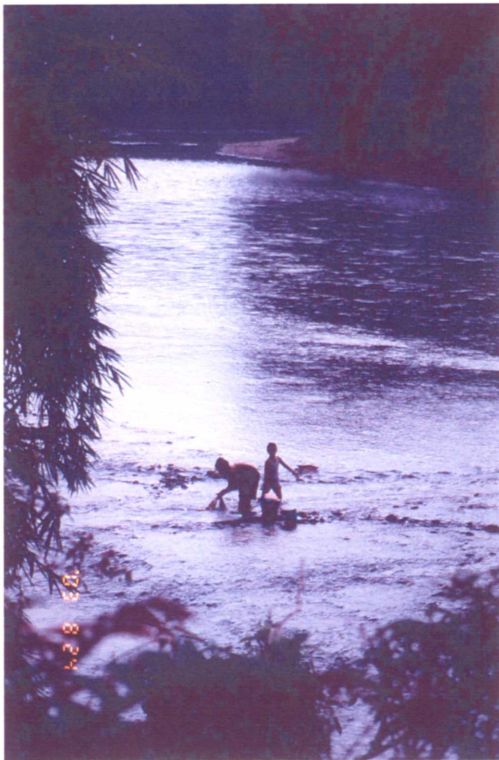
## □ 住民生活と川との関わり

当職の調査は大変短期間のものであったため、住民生活と川との関わりについて、踏み込んだ調査はできていないが、その限られた中でも、住民生活と川との密接な関わりを感じさせる風景に出会った。

写真 68 は、2003 年 8 月の調査時のものである。タンジュン村に着いたのは夕暮れ時であったが、黄昏の中で住民（女性）2名が川で洗濯をしていた。場所は、バンチャ・ルブック地区とバリック・タンジュン地区の間にある川の中州である。川が住民たちの洗濯場なのである。

また、写真にはとっていないが、2005 年 9 月の調査で、女性や子供たちが川でマンディ（水浴び）をしている風景にも出会った。

写真 69 は、2005 年 6 月の調査時のものである。撮影した場所は、写真 68 とほぼ同じところである。子どもたちが川で遊んでいた。川は子どもたちの大切な遊び場でもある。



68



69